

2011年の韓国とソウル大学宗教学科

新里 喜宣

私は2011年2月27日に成田空港をたち、西江（ソガン）大学というところでの半年間の語学研修を経て、2011年9月1日、ソウル大学宗教学科博士課程に入学した。このエッセイでは、(私が思うに)激動の1年であった2011年の韓国社会について振り返り、次いでソウル大学での体験を記してみたい。

2006年に東京外国語大学の朝鮮語専攻を卒業した私は、同年、宗教学研究室の修士課程に入学した。その後は博士課程に進学し、現在も休学しながら在籍しているが、大学院に入学した当初から、自分の故郷である沖縄と韓国の民俗宗教の比較を大きなテーマとして研究したいと公言していた。とはいうものの、歩みの遅い私には修士課程からすべてをカバーすることは到底不可能であったので、修士論文は沖縄の民俗宗教について書くことにした。そして、博士課程進学後に韓国の研究をスタートさせたのだが、2011年、とうとう念願が叶い、韓国に旅立つことになった。

韓国語の勉強は定期的に行っていたので、留学当初は大きな問題はなかった。生活用品の買い出しも順調であった。しかし、その矢先に、3月11日の東日本大震災が起こった。この日のことはよく覚えている。朝は語学スクールで授業があったが、生活も落ち着いてきていたので、気晴らしに家の近所にあるブックオフ（日本のブックオフのソウル支店）で漫画を立ち読みして3時頃に帰ってきた。そして、パソコンを立ち上げメールを確認してみると、沖縄にいる母親から「地震があり

大変なことになっている」という知らせが入っていた。その時はちょっと大きな地震があったんだろうなという程度の認識であったが、時間が経過するにつれ、何かとんでもないことが起こったという実感が湧いてきた。インターネットはほとんど地震関連の記事で埋まり、被害の深刻さについての報道が徐々に増えていく。友達に連絡しようにも、メールがうまく送信されず、どうやら相手の方も受信できない状況のようだった。不安がどんどん募る中、近くの食堂に夕飯を食べに行ったら、韓国のテレビも日本のNHKの映像を使って地震の報道に終始し、韓国人も箸を動かさずにテレビに釘付けになっている。そわそわし、落ち着かないなか、当日、そして12日と13日は、ほとんど一睡もせずUSTREAMで流れる日本の各局の報道を見て過ごした。

今回の震災に対して、韓国人は最大限の配慮を見せてくれたように思う。一部の心無い報道や対応もあったものの、それはほんの一部で、大部分の人は震災に対して自分たちのことのように心を痛めていた。語学スクールの先生は、以前、宮城出身の学生を教えていたらしく、彼らの安否を気にしながら、私のことも気遣ってくれた。当時、大学構内や道端、地下鉄の駅など至る所で日本への募金活動が行われていた。近所のスーパーにも募金箱が設置され、壁には「日本、頑張れ」と大きく書かれたポスターが貼られていた。そして、その下には各人が自由に書き込んだ日本および日本人へのエールの手紙が添えられて

いた。

韓国人が日本の震災に対して今でも高い関心を寄せていることは事実であるが、残念なことに、3月末の教科書検定結果の発表により、公的な次元での支援活動はほとんどストップしてしまったようだ。ここでは深く立ち入らないが、これには領土問題が深く関わっている。結果として、8月1日に自民党議員が鬱陵島へ行こうとした際に起こった、韓国入国に関するドタバタからもわかるように、2011年の日韓はこの問題に大きく振り回されてしまったように思う。とはいえ、日本の報道を見ているだけではなかなか伝わらないであろうが、実際、いまの韓国の若い人たちは、領土問題に対してあまり関心をもっていないように見える。むしろ若者ほど領土問題に対して敏感に反応するという意見もあるが、私には、彼らの実際の生活に関わる問題、たとえば次に述べる「半額登録金」問題への熱い対応を見ていると、教科書問題などさして大きな関心事ではないように映る。

韓国は物価はまだまだ安いものの、学費（登録金）はものすごく高い。日本の大学よりも高いと言って良いだろう。数少ない国立大学も同様であるが、奨学金制度がほとんど整備されていない関係もあり、韓国人にとって登録金は非常に重い負担になっている。本稿執筆当時の大統領である李明博氏は、大統領選挙の際、毎年上がっていく登録金を任期中に半額にするという公約を掲げたが、2012年12月の退陣を前にしてまったくその成果を挙げられなかった。これに苛立った学生たちが5月頃から激しく繰り広げたのが「半額登録金」という名のデモであった。韓国人は1980年代の民主化運動に比べたら半額登録金など大したことはないと言うが、私には、この運動はデモによって民主化を勝ち取った韓国の力強さの一端を示すもののように見えた。な

かでも、ソウル大学で6月1日に起こった、国立大学法人化による登録金の引き上げを危惧した300人以上の学生らによる総長室占拠事件は、その肝が据わった行動に一種の感動を覚えた。また、続く10月頃から本格化した韓米FTAに対する抵抗も、11月22日には国会で催涙弾が飛ぶなど、日本ではおよそ見られない、熱く激しい光景であった。

このような興味深い社会情勢を眺めつつ、この世の終わりかと思えるほどの7月の豪雨（韓国語では「暴雨」）に驚愕しながら、私の方はといえば、語学スクール在学当時はせっせと韓国語の勉強に励んでいた。また、奨学金のプログラムに組み込まれていた、大学生の女の子との週1回のおしゃべりタイムを満喫（一緒に「トランスフォーマー3」を見た）し、念願であった犬鍋に挑戦（結構美味しい）したりと、比較的のんびり過ごしていた。だが、9月のソウル大学への入学により、この穏やかな日々は終わりを告げた。授業や研究発表、そして指導教官主催の勉強会などなど、一日も休めない生活がスタートしたのである。

9月2日に研究室の自治会が主催する開講の集まりに出かけたのだが、そこでは熱烈な歓迎が私を待っていた。あとで聞いた話だが、東大宗教学の学生がソウル大に来るということで、少し話題になっていたようだ。私の専門は民俗宗教、とりわけシャーマニズムに関心を持っているので、韓国の儒教と巫俗の関係について、李朝時代の資料を読み込みながら研究を進めておられる崔鐘成という先生が指導をして下さることになっていた。私に対してとくに関心を持ってくれていたのはそのお弟子さんたちであったが、その場でなんと行列を作って私へ挨拶をしてくれた。おそらくこれは今後の人生でもそう無いことではないか。その日は当然のごとく飲み会に突入し

たのだが、大勢の韓国人が集まるなかで外国人は私ひとりという状況は人生初であった。2次会までは彼らの韓国語を何とか理解できたように思う。しかし、3次会にもなるとみな酔いが回り始め、話が論理的ではなくなってきた、あまり聞き取れなかったことを覚えている。いまでも飲み会の言葉は聞き取りづらい。外国人にとって一番難しいのは酒の席の言葉ではないかと思う。そんな感じで、不安と期待が入り混じったソウル大学での初日は終わった。

さて、授業が本格的に始まると、これは舐めてかかるとまずいことが即座にわかった。たいていの授業においては、初回到先生から授業のシラバスが配られるのだが、そこには大きな主題が1つ提示され(たとえば韓国の新宗教)、課題の本や論文がびっしりと書き込まれていることに驚愕した。東大宗教学の場合であれば、大きな主題の何か1つに焦点を絞り、1つか2つほどのテキストを丁寧に読み込んで1学期あるいは1年が終わると思うのだが、ここではむしろ大きな主題に関する先行研究をすべて読むというスタイルである。基本的には毎週2人ほどの発表者が選ばれ、1人がだいたい5個か6個ほどの論文・書籍の要約を行う。1人当たり約30分、2人で1時間ほどの発表の後、残りの2時間は総合討論に充てられるが、その大半は先生が思いのままに語り続けることが多い。とはいえ、ただ聞いていれば良いというものでもなく、その週に発表しない学生も、事前に課題を読み込んでおき、「レビューペーパー」なる名目の感想文を毎週先生に提出しなくてはならない。従って、読まずに授業に参加するのはNGである。

1学期に受講できる授業は3コマまでである。私も3つ受講したのだが、先生も学生も手抜きがなく、すべてが全力投球の授業であ

った。だいたい1ヶ月に2回か3回ほど発表しなくてはならず、それをこなすため学期中の大半は授業の準備に費やすことになったが、授業によっては「踏査(タブサ)」という名の課外実習を設けるものもあり、これは大変興味深かった。指導教官の授業で「紺岳山(カマクサン)」という京畿道(キョンギド)にある山へ踏査に出かけたのだが、その主旨は山に散在するムーダンたちの祈禱所を見学するというものであった。私にはこれまで、韓国のシャーマンとして名高いムーダンを実際に見る機会はなかったもので、目の前で繰り広げられる「クツ」という儀礼を食い入るように観察した。韓国のシャーマニズムに関する先行研究では、ムーダンを「踊るシャーマン」として形容することが多く、私の方も派手な民族衣装を着て激しく踊る光景を期待していた。しかし、なるほど確かに衣装は派手だが、どうも踊るというよりはただ跳んでいるように見える。そこで、先生に「踊る」というのは正しくなく、むしろ「跳ぶ」という形容が精確ではないかと尋ねてみたところ、私たちが見た儀礼はおそらく依頼人があまりお金を出しておらず、クツの内容が簡略化され、踊りではなく跳ぶだけになっているのだと教えてくれた。シビアな世界である。

踏査は、日頃ソウル大学から出ることのない私に、韓国社会の興味深い一面を見せてくれた。私たちは、11月に行われる「大学修学能力試験」という日本のセンター試験に相当する国家的行事の1週間前に紺岳山を訪れたのだが、ソウルから少し離れた山の一角で、制服を着た女子高生とその母親と思しき女性が、ムーダンの指示に従い祖先神に対して熱心に祈りを捧げているシーンには鮮烈な感動を覚えた。周知の通り、韓国の受験熱は日本の比ではない。おそらく、娘以上に受験に対して神経を尖らせている母親の意向でムーダ

ンのもとを訪れたのだと推測されるが、見た目は非常に近代化が進み、とにかくハイテク機器を使いたがる反面、表通りを一歩外れた先には豊かな民俗文化がいきいきと広がる現代韓国の縮図を見たような気分であった。

ソウル大学での生活については、色々と言いたいことがありすぎて紹介し始めるとキリがない。そこで、特記しておきたいこととして、最後にソウル大学宗教学科の研究に対する取り組みについて述べることにする。この学生の言葉を借りれば、ソウル大学の前身にあたる京城帝国大学の宗教学科では宗教学がしっかりと根付いていたものの、1945年の解放以降、宗教学はすっかり神学に乗っ取られてしまったとのことである。現在の教授陣がその状況を克服し、宗教学として新たなスタートを切ったため、先生方が韓国宗教学の第1世代、学生が第2世代という認識が一般的なようだ。そのため、まだまだ外国や日本から学ぶことは多いという姿勢であり、そのぶん東大宗教学に対する関心は高い。

彼らがとくに興味を持って訊いてきたのは、水曜ゼミ（木曜ゼミ）についてであった。上述したように、ここでは授業が日本でいうゼミとは違っていて、学部の聴講型の授業に近い。水曜ゼミのような比較的自由的な形態の演習はなかなか受け入れられないようであり、学生たちが各自の研究について発表し討論する機会はあまり無いのが実情である。こういった事情のため、よく顔を合わせる人でも実際に何を研究しているのか皆目見当もつかない場合もありうるのだが、ちょうど私が入学した頃から、この状況を改善しようとする動きが出てきた。これは学生が主導的に行う月1回の発表会という形で結実したが、水曜ゼミを参考に色々アドバイスをしていた関係もあり、有難いことに私が第1回目の発表者に選ばれた。準備はなかなか大変であっ

たが、彼らにとっては初めて聞く存在である沖縄のユタについて、そして京城帝国大学の教授であった秋葉隆についての話を興味を持って聞いてくれ、有意義な討論が出来たように思う。

外国の宗教学について吸収できるものは全て吸収するという姿勢は、先生も同様である。入学当初、私は指導教官から1つ宿題をもらった。それは、先生が主催する週1回の勉強会で、日本の民俗宗教やシャーマニズム研究を紹介せよというものであった。そこで、先生や学生が日本の宗教学についてどの程度知っているのか伺ってみたところ、シャーマニズム研究において必須とも言える櫻井徳太郎先生や佐々木宏幹先生の研究に関しては、翻訳書もあり、またソウル大学の図書館にある程度所蔵されているため、私が紹介する必要はないようであった。そして、宮田登先生についても、こちらも翻訳書があるため、好んで読まれていることがわかった。それでは駒澤大学の池上良正先生はどうかと尋ねてみたところ、意外なことにこちらは全く知られていなかった。やはり翻訳書が出ていないと日本の研究について知るのは難しいようで、私は早速池上先生の論文や書籍をいくつかピックアップし、紹介することにした。

勉強会の進行形式としては、まず日本語を読める学生が内容を要約し、それをベースにみなで読み進める。そして、表現や意味の面で質問が出たり、内容的に補足が必要な部分があれば、私が可能な限り説明していくというスタイルである。当初はみな半信半疑で池上先生の論に耳を傾けていたが、面白さにだんだんと気づいてくれ、つい先日、『死者の救済史』（角川書店、2003年）を読了した。供養と憑依をキーワードに、死者をいかにして救済するかという側面から日本の宗教史を読み解こうとするこの著書は、韓国人にとって

だいぶ刺激的であったようだ。読み進めるうちに、李朝時代から仏教を排斥した韓国と、仏教が常に中心的な役割を果たしてきた日本との違いが浮き彫りになり、また、儒教を死者供養という観点からもう少し掘り下げて考えてみる必要性が共通認識となっていく。私の方は、ときおり思いもよらない質問をもらい、たじろいでしまうこともあったが、その分学ぶことも多かった。何よりも、他者の論にじっくりと耳を傾け、それを積極的に吸収して自分たちの議論に活かそうとする熱意には目を見張るものがあった。この点、自分自身の学問への姿勢を反省する契機にもなった。

この勉強会は今後も続くことが決定した。次は『悪霊と聖霊の舞台』（どうぶつ社、1991年）である。私としては『民間巫者信仰の研究』（未来社、1999年）も紹介したいという野望を持っているが、どうにかして成就させたい。実は、この勉強会を通して皆が沖縄に対して関心を持ってくれるようになり、2012年2月には踏査で沖縄に行くことが決まった。研究室では最近「ハイサイ」や「ニヘーデービル」という言葉が通じるようになって

きている。沖縄について知見を持つ韓国人というのはだいぶ貴重ではないか。様々な面で助けの手を差し伸べてくれ、韓国宗教について惜しみなく教えてくれることの恩返しとして、私も最大限伝えられるものは伝えていきたいと思う。

ソウル大学宗教学科も韓国社会も、これから色々なことが起こり、またどんどん変わっていくのだろう。本稿の依頼をもらった直後である12月19日、北朝鮮の金正日総書記が死去したという報道が伝えられた。金日成主席の死去の際の報道映像は幼心に覚えているので、韓国社会は今回も大混乱に陥るのではないかと身構えていたのだが、実際はかなり落ち着いた対応であった。宗教学科の友達は、「新里、良かったな。第2次朝鮮戦争に立ち会えるぞ」と笑って冗談まで言っていた。この言葉が現実のものとならないことを祈ってやまないが、このような冗談を言えること自体、一昔前の韓国であれば考えられないことではないか。引き続きこの興味深い社会を観察しつつ、ソウル大学での勉強に励んでいく所存である。